氏名（本籍）	大部　令絵
学位の種類	博士（障害科学）
学位記番号	博甲第　7384　号
学位授与年月	平成　27　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	インドネシアの大学生における障害者イメージ ―イメージの内容・構造・適用に焦点をあてて―

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	鄭　仁豪
副　査	筑波大学教授	教育学博士	柿澤　敏文
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	野呂　文行
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	佐藤眞理子

論文の内容の要旨

（目的）

インドネシアでは、障害者に関する法律「1997 年法律第 4 号」の制定により、障害者の地位、権利、義務が明文化され、インクルーシブ教育の推進や地域社会に根ざしたリハビリテーション活動（Community-based rehabilitation）の実践が展開されるなど、障害者を取り巻く環境が改善されつつある。一方、障害者の社会的環境に対する様々な問題も指摘されており、その一つに、障害者の社会的参加を阻む否定的イメージの問題があげられている。インドネシアでは、これまでマスメディア等を通して、様々な啓発活動が展開されているものの、障害者に対する否定的なイメージがもたらす偏見や差別の解消には至っていない。

本研究は、インドネシアにおける障害者イメージの様相を明らかにすることを目的とした。具体的には、インドネシアの大学生が抱くイメージの内容と構造を究明し、それらのイメージの内容と構造に対する性別および障害者との接触経験の影響を明らかにした。さらに、今後の啓発活動に寄与する知見を得るため、どのような障害者イメージが具体的人物や概念に適用されるのかについて、また、インドネシア国内の先行事例において利用されたマルチメディアを含む情報源の影響について明らかにした。これらを通して、障害者に対する否定的なイメージを抑制・解消するための方策について考察を行った。

（対象と方法）

まず、障害者イメージの内容と構造を明らかにするため、『視覚障害者』『聴覚障害者』『知的障

害者』『運動障害者』の 4 種類の障害者の単語刺激を提示し、動詞または形容詞による回答を求める質問紙調査を実施した。対象者は、第１研究と第２研究では、ジャワ島所在の 3 つの総合大学に在籍する大学生 230 名（男性 83 名・女性 147 名）、第 3 研究では、同島所在の 3 つの総合大学に在籍する大学生 194 名（男性 77 名・女性 117 名）であった。

第 1 研究では、イメージの内容を明らかにするために、回答で得られた語（以下表現語）を意味内容の類似性に基づき分類した。4 種類の障害者に対するイメージの内容は、主に出現頻度 5%以上の表現語を中心に検討し、性別と接触経験の影響について調べた。

第 2 研究では、イメージの構造を明らかにするため、質問紙調査で得られた回答の表現語群を抽出し、性別と接触経験による多層クロス集計表に基づくコレスポンデンス分析を実施した。

第 3 研究では、まず、障害のある具体的人物像と障害者という概念語に対して、どのような障害者イメージが適用されるのかを、制限連想法による質問紙を用いて明らかにした。同時に、５種類の情報源（書籍、事件報道、ドキュメンタリー報道、フィクション作品、授業）をとりあげ、対象者の属性（性別と接触経験）毎にイメージの適用に対する影響について検討した。

（結果）

第 1 研究の結果では、4 つの障害種別や対象者群の表現語群に、『（各種）障害のある』『補助具を使う』といった障害を表す具体的表現が 5%以上の回答がみられ、障害者の有する障害に結びつくイメージがあることが示された。一方、障害種別を問わず、『性格』カテゴリーの形容詞もイメージの表現語として示された。また、視覚障害者イメージにおける『敏感な』、知的障害者イメージにおける『利己的な』、運動障害者イメージにおける『運動障害のある』『劣等感の』は 10%以上の出現頻度であり、これらが各障害の代表的な障害者イメージであることが示された。また、視覚障害者イメージでは『社交的でない』、聴覚障害者イメージでは『社交的でない』『アクティブな』、知的障害者イメージでは『話すのが難しい』、運動障害者イメージでは『良い』『補助具を使う』が各障害者におけるイメージとして示された。

第 2 研究の結果では、4 種類の障害者イメージの構造は、4 種類の障害ともに、『性格』と『障害の具体的特徴』を表す第 1 次元と、4 種類の障害で表現内容は異なるものの、障害者の社交性や能力を表す第 2 次元で、構成されていることが明らかになった。また、性別と接触経験の影響については、接触経験のある女子学生は、障害種別にかかわらず、障害者の具体的特徴に着目する傾向が、一方、接触経験のない女子学生は障害者の対人交流上の問題に着目する傾向が見られた。また、男子学生の視覚障害者イメージは、接触経験のある者は性格に着目する傾向があること、聴覚障害者イメージについて、接触経験のある者は対人関係上の問題に着目する傾向があることが明らかになった。

第 3 研究の結果では、4 種類の障害に共通して、具体的人物に対するイメージ適用の方が、単語刺激に対するイメージの適用より、選択される表現語が制限され、特定の表現語によるイメージが対象者群内において多くの者に共有されていることが示された。また、障害者に関する情報源がイメージ適用に及ぼす影響については、①「書籍」「授業」はいずれも単語刺激の障害者に影響する情報源であるが、「書籍」は具体的人物への適用に影響するのに対して、「授業」は具体的人物への適用には影響しないこと、②「事件報道」は女性・接触無群の身体障害者に対するイメージの適用に、「フィクション作品」は女性・接触有群の具体的障害者に対するイメージの適用に影響を及ぼ

していることが示唆された。また、③男・接触有群は、ドキュメンタリー番組や授業から情報を得る場合、視覚障害者のイメージとして能力の低さやストレスにさらされた状態といったイメージが適用されていることが示された。

（考察）

インドネシアの大学生が抱く障害者イメージの内容は、障害に固着した障害イメージとともに、個人の一般的な特性にかかわる人物イメージが混在していることが示唆された。本研究で示されたインドネシアの大学生が抱く障害者のイメージとして、『劣等感の』『利己的な』といった社会的不利に関わるイメージが確認できた。このことは、『利己的な』というインドネシア特有の“甘え”や、『劣等感の』という能力の低さを表す概念が存在しており、これらのイメージがインドネシア社会の教育・福祉システムと連動し機能する危険性も考えられた。イメージの構造は、障害の具体的特徴と性格からなる第1次元と障害者の社交性や能力からなる第2次元で構成され、これらの次元は性別と接触経験により影響を受けていることが示唆された。さらに、情報源では、「書籍」「授業」などの一般知識情報源と「事件報道」「ドキュメンタリー番組」「フィクション作品」などの個別知識情報源により、また、性別と接触経験の有無により、イメージ適用の影響に違いがみられることが示唆された。否定的なイメージの適用を抑制する方法として、接触経験によって包括的認知が適用され、対象者の個性を認識させることにより、とりわけ、障害者に対する性格特性のイメージ適用を抑制することが考えられた。

本研究で得られた知見から、インドネシアにおける障害者の社会参加を妨げるイメージの抑制や解消のためには、①障害者とある程度の人間関係を構築しうる接触経験を得ること、②障害者啓発活動の推進と同時に、インドネシアの文化文脈と共存しうる社会参加システムの運用を目指すこと、が求められる。また、性別及び障害者に関する情報源の観点から、③障害者の社会参加を阻むイメージの適用を防ぐため、書籍や授業によって、障害の特徴に関する知識を伝えること、④対象者の性別と情報源の組み合わせ次第では特定の障害者イメージの抑制や解消に至らない可能性があるため、啓発活動の対象者によって情報源を使い分けること、が有効であると考えられた。

最後に、今後の課題として、インドネシア全土における大学生や世代間の違いに着目した研究や、インドネシア社会において大きな影響を及ぼす宗教という社会文化的文脈の考慮することにより、障害者の社会参加に貢献できる啓発プログラムの開発が可能になると考えられた。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、これまでインドネシアにおいても研究されてこなかった、障害者イメージの実態について、大学生を対象とし、その基礎的知見を得るために、実施された研究である。

インドネシア国内全人口の6割を占めるジャワ島の大学に在籍する大学生を対象とし、4種類の障害者（視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、運動障害者）に対して、どのようなイメージの内容を有し、そのイメージはどのような構造をなしているのかについて検討した。さらに、具体的人物としての障害者に対して、どのような障害者イメージが適用されるのか、またそのイメージの適用に対してどのような情報源が影響を及ぼしているのかを検討した。

本研究では、インドネシアの大学生が抱く障害者イメージは、障害に膠着し障害者を否定的に捉

えるイメージとともに、人としての障害者の特徴を捉えるイメージが混在する内容であること、さらに、障害者に対するイメージは、障害者の具体的特徴と性格に基づく第 1 次元と、障害者の社交性や能力に基づく第 2 次元で構成され、接触経験や性別により影響を受けていることを示した。また、これらの障害者イメージは、人物に対してより具体的なイメージで適用されること、また、その適用の際には、「書籍」「授業」といった一般知識情報源と「事件報道」「ドキュメンタリー番組」「フィクション作品」などの個別知識情報源により、また、接触経験や性別により、影響をうけることを明らかにした。これらの知見をもとに、障害者に対する否定的なイメージの抑制や解消のための方策について示唆した。

インドネシアにおける障害者イメージの全貌を明らかにするためには、インドネシア社会に極めて大きな影響を及ぼす宗教の影響や対象者の年齢を考慮した総合的検討が必要であるが、本研究では、インドネシアにおいてこれまで研究されてこなかった大学生が抱く障害者イメージの内容、構造、適用に関する基礎的知見を提供している点、また、今後のインドネシアにおける障害者イメージの改善のための示唆が得られている点は高く評価できる。さらに、本研究の遂行にあたり、インドネシア側の研究者と協力関係を構築し問題解決に至っている点は、国際研究協力の一環としても評価できる。

平成 27 年 1 月 13 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。